

## 2.3 コメンテーター 3



中村正

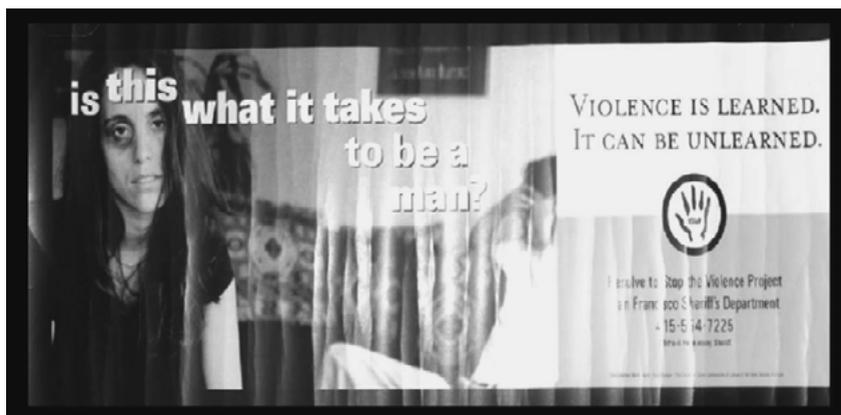
(立命館大学大学院応用人間科学研究科教授)

シンポジウムを聞きながら、あるいは合唱団の皆様のお話、歌を聴きながら感じたいことについてライブ感覚で話をした方がいいのでしょうか、事前にレジュメを作ってまいりましたので、それに基づいて話をします。素晴らしい合唱を聴いた後で、万感を胸に終わった方がいいのでしょうか、シンポジウムということなので堅苦しい話になるかもしれません。私は加害の研究をしています。とくに、対人暴力をくわえる加害者と臨床をとおした立ち直りのための取り組みをしています。刑務所の中、それから子どもを虐待する親たち、ハラスメントをしてしまった人たちです。少年刑務所や児童相談所がその場です。加害者との関わりは、社会の脱暴力、贖罪、回復などにとって大きな意味があります。

最初は自己紹介風に話をさせていただきます。村本さんとは同じ応用人間科学研究科の同僚でありまして、これまでもお話を聞いておりますので、以前からこの取り組みは知っているところです。しかし今回、改めて背景も含めてこの取り組みのお話を聞かせていただき、触発されたこともあり、それらを中心にお話します。この写真はサンフランシスコの保安官事務所の暴力防止キャンペーンの写真です。



アルマンドさんが「潜在的加害者」という話をされましたが、非常に重要な考え方だと思いました。写真の右の端の方に「Violence is learned.」と書かれています。暴力は学習されていくと書いてあるのです。人は徐々に暴力的になっていきます。初めから暴力的なパーソナリティがあるわけではなく、暴力的になっていく。そして、「It can be unlearned.」とも書いてあります。これは「脱暴力」という意味です。20年ほど前にサンフランシスコで調査をしていた時の写真です。男の子がこんな風にして暴力をふるって、いわば「暴力の文化」の中を生きていきます。日本でも同じでしょう。いじめの世界から始まっていくわけですね。戦争の話もそうです。兵士たちは男性でした。兵士たちもそうであったように人は徐々に兵士になっていきます。最初から兵士の人格があるわけではありません。兵士になっていくのだと思います。それは、DVや虐待の加害者もそうです。徐々にしていくのです。



この暴力を学習していく過程をもう少し緻密に、明らかにしたいなと私は思っています。私が見ている加害者たちも男性です。ミクロもマクロも問わず、男性の暴力に関心があって、男性性と暴力性の関係性が私の研究のテーマとなりました。こうした角度から関心を持って加害者臨床となりました。臨床というのは一種の技巧や技法、個別性を大切にします。仮にアートといえます。今日のドラマセラピーも、合唱も、アートそのものです。くわえて、人間科学と題したタイトルはどちらかというとサイエンスです。サイエンスとアートをどうつなげるかということで企画のテーマの意味がでてくると思います。サイ

エンスという点では、やはり歴史的な事実をきちんとはっきりさせていく。そして人間性と攻撃性がどう関係するかということを経験的にはっきりさせていく。色んな研究があるかと思います。アーツとサイエンスから問題に迫ろうとしているのだと思います。アーツアンドサイエンスといえば大学における教養そのものを意味します。人間を語ることの教養としてもこうしたテーマ群があるのだと思いました。脱暴力にむかう知識や実践はやはり私たちの教養にしなければいけないと思っていますところでは。

さらに暴力の学習についての別の話です。刑務所の中にいると、結構色んなことが見えてきます。たとえば健康と病気とセルフケアのことです。私が相手をしているのは少年刑務所の性犯罪者ですが比較的重たい刑を受けた人たちです。脱犯罪のために自己コントロールのことを強調します。受刑者たちには病人が多いという印象です。病気を持っている人が多いのです。たとえば虫歯が目につきます。受刑者の有病率は統計としても調べてみたいのですが、自分に対してケアしないということだと思います。刑務所に来たから病気になっているのではありません。病気になっていっているのです。自分に対してケアをしないともし言い換えることができます。普遍的には「痛みへの手当」ということです。そういう人たちに対して、被害者理解といいますが、他者の痛みを分かるといって課題があります。贖罪と脱暴力への階梯には欠かせないのがこの自己へのケアです。「ケアの能力」ってものすごく大事だなと思いました。

ですから、刑を受けて、罪を償うというだけではない、何か別の次元の問題、あえていえば自己への暴力性がずっとその人たちの中に蓄積しているのだと思います。さらに暴力の学習の典型は暴力の連鎖です。虐待する親たちは幼い



頃に虐待されて育っています。これはかなりの確率です。積み重なって「暴力の文化」というものが純化されて蓄積されるのかなと思います。別の資料ですが性犯罪者たちが出所した後、ここに性犯罪者が住んでいますという看板です。

ミーガン法にもとづきます。この場はテキサス州です。さて、これを皆さんどう思われますか。ここに元性犯罪者が住んでいます。この家は火を付けられるかもしれません。暴力の文化の悪循環です。これを日本に導入することに私は反対です。こうした取り組みを導入すべきだという日本の政治家もいます。暴力をなくすためにさらに排除的な仕組みが用意されていきます。

さらに別の関連事項です。刑務所の中で接触している人たちの多くは性差別主義であることが多いです。そして貧しい人に対する憎悪もあります。もちろん自分の貧しさへの劣等視も重なります。他罰性が暴力を乗り越えることに障害となりますが、責任転嫁の原初的な感覚として他罰性があります。加害を加害として成立させない、つまり相手が悪いという独特なステレオタイプや偏見としてこれらは機能します。被害者非難とも呼ばれています。性犯罪や虐待やDVや少年暴力によく現出します。ある思考の偏り、認知の偏りがそこには見えてきます。対人関係のミクロから社会問題へとつながるマクロまで暴力の文化や連鎖をとおしてつながっています。そんなことの積み重ねの中で「暴力の文化」がこの人たちに蓄積されているのだなと思いながら、人が徐々に暴力的になっていくプロセスを実践的に研究しているところです。

最終的には色々なプログラムを組むけれども、何とかしてこの蓄積された「憎悪の文化」「暴力の文化」、それからもっと言えば「他罰の文化」「暴力の学習」こんなことを何とか乗り越えていきたいと思うのです。もちろん育むべきは「共感の文化」、「平和の文化」ですし、暴力の脱学習の取り組みです。そうしたことの大事さを今日のお話からお聞きすることができました。ですから、何とかしていろんな手段を通じてこの暴力の脱学習に向かいたいなと思っています。そんなことの中で私にできることを日々考えています。

こうしたことなかで「私は誰なのか」という立ち位置をいつも考えています。それは、私を巡る社会臨床、私というのは、単に私がそこにあるわけではなくて、そこに歴史や社会や共同性が埋め込まれた私です。そこから私はやはり固有名詞をもった中村正です。くわえて大学教授でもあります。男性です。父親です。別氏夫でもあります。私は妻と同棲しているだけなので、籍を入れていません。沖縄によく行きます。ヤマトンチュと言われています。北海道のアイヌの人と交流したことがあります。北海道ウタリ協会の人たちと対話をし

たことがありました。本土人と私は呼ばれました。人種差別の厳しいアメリカのディーブサウスに行ったことがありました。ジャップと呼ばれました。シドニーに暮らしていた時に日系コミュニティの人たちからこんなことも言われました。オーストラリアは日本が攻め込んだ国なのです。退役軍人オーストラリア人は日本人をとて嫌っていると言われました。退役軍人たちのパレードがあるのですがその日、日本人は外に出ないように日系コミュニティでは言われていました。この点に関しては厳しい目がオーストラリアにはありました。でも日頃、接触しているオーストラリア人はそんなことはありません。こうした位置に置かれると日本にいると感じない何かを感じます。南京に身を置く経験がこの取り組みでも語られていました。同種の感覚が生起するのだと思いました。どこかでつながる、あるいは自分がバラバラになっていきそうな気もしながら、聞かせていただきました。

そしてもう一つ、「潜在的加害者」というお話をされましたが、とても大事なテーマだと思いました。さっきから言っている人は徐々に加害者になっていくというプロセスと関わって、私の中の「潜在的な加害者性」みたいなものを感じながらさっきの話と関わりながら聞きました。しかし、そうは言っても色んな声が複数響きながら私の中に残っています。やはり私は「他者の声」を聞くことができるとは思いたい。先ほど言った受刑者たち、あるいは虐待親たちの人生にある被虐待体験が暴力の再生産へと人を駆り立てます。よくここまで生きてきたと思うほどの虐待体験がでてきます。とても貧しい中を生きてもいます。貧しいからといって貧しい人を批判する回路もあります。とても複雑です。

だから、加害者の中にある色んな「複数の声」を聞く力がないと、憎悪 (hate) だけが全面化するんですね。ですから、ここには性犯罪者が住んでいるというラベルを貼る傾向がでてきます。そんな重なりの中で「私の中のあなたたち」ということがとても今日は強く、私の中に生起してきました。そんなことを繰り返しながら和解とか、共生とか多文化とかいう言葉が出てくるのでしょうか、もう一つ、人種的民族的なマイノリティの人たちからの問題提起も重く受け止めています。「共生」、共に生きるというのはきれいな言葉だけれども、これはマイノリティ側から言わない言葉だということです。「共生」という言葉を使

うのはマジョリティだ、このことを意識してくれと言われました。非常に厳しい問いかけでした。その問いかけに私はまだ答えが出ません。きれいすぎるからです。ともに生きるというのはマジョリティがいつも使う言葉だ、マジョリティの反省はどこにあるのだと厳しく問いかけてくれました。いい問いかけだといまでも思っています。まだ答えは出ていません。そんな中で和解とか修復とか、色んな言葉を使いながら、私の中のあなたたちの言葉をどう聴けるかということを感じながら南京の被害者たちの声を聴き、それに応答する私の立ち位置を考えていました。そんな中で最終的には私は動き＝実践の中で考えるしかないし、研究していくしかないかなと思っています。

今日の合唱の中でも、そしてアルマンドさんが後でやってくれるドラマワークでも、南京事件もなかったという人たちからも私達は何かを見なければいけない。それらは「鏡」、私たちの社会を映す「鏡」だけではなくて、そこをとおして何かを見る「窓」にしなければいけないとも思いました。そして、「私とあなた」の関係という、二人称の関係が非常に大事だと、これは臨床の関係なのです。アーツの関係です。三人称は科学の関係です。そして、一人称は、私が語る、この人たちの語りです。恐らくこんな科学の利用性も考えなければいけないとも思いました。ワシントンDCのホロコーストミュージアムに行った時に工夫がされていたことを思い出します。入口で虐殺された被害者の顔とプロフィールを記した名刺大の紙を渡される。私はその方と一緒にホロコーストミュージアムを体験することになります。大変、良く工夫された施設でした。この方のことが展示してあります。この方と語り合いながら、是非展示を見てくださいという主旨のよくできたミュージアムでした。

そして、私は一人ではなくて、私の中に複数人がいて、私の中の多層性、それは受刑者たちや非行少年たちやその方々の声が重なります。私の臨床の対象者との共通性は男性です。男性性というのは途中まで共通なのです。そんなことを感じながら私は私の中の多層性を加害者臨床をしながら感受しています。社会との関連もそこを通じていくのかなとも思いました。そして、身体それ自体の大事さも、さっきの一人称、二人称ではないけれども、大学にいるとどうしても三人称の立場に立ってしまいますが、二人称的にカードを渡されたホロコーストミュージアムの話とか、当事者の話とかを重ね合わせていきますと、やは

り私の身体や感情が反応していきます。さっきの加國さんの小学生の話もそうかもしれません。私の体が反応するのですね。それをどうやって自分の物語として取り込んでいくのか、そして、小学生がお腹を壊したらしんどいけれども、私がお腹を壊したら私はそれを私の物語にしなければいけない。そんなことも感じながら、感情を持つ私、でもそれはどこかでつながって男性として、何か共同性を持ってしまっている私を感じ、あるいは色んな中に身を置きながら、違和感や不快感も含めて「統合性」の中で見えてくる私もあります。刑務所や虐待親と接触していると、ピリピリしてきます。それは、刑務所システムと児童相談所システムがピリピリさせるのではなくて、常に身構えている。常に身構えて防衛している男性たちがそこにいるからです。それだけ世の中を暴力があふれた世界として見ているのでしょうかね。

多分、兵士たちもそうだったかもしれない。だから、思い出したくないのだ。だから忘れたいのだ。「感情麻痺」というのは、加害者たちの特徴です。ほとんど語りません。沈黙のようであります。そんな中で「声を聴く」という作業をしています。まとめる加害者にきちんとなっていないのです。感情を麻痺させている、事実が浮かんでこない。そんな中で対話をしながら、きちんと加害者にしていく。そういうことの繰り返しです。個人に迫るのも大事だし、社会がそのことに対して関心を持たなければならないしということでもあります。

オーストラリアで長く調査をしていたこともあります。アボリジニの先住民たち、保護的な福祉の結果として、アルコール依存症が多くなったり、自殺が多くなったりしていきます。どこの国でもそうです。だから臨床の課題が生起しますが、臨床というのは社会への適用という側面が強く出てきます。この中でオーストラリアの臨床家たちは大変困っていきます。臨床の前に、オーストラリア社会はアボリジニの人たちに謝ってくれとなりました。その結果、とくに盗まれた世代としてあった親子強制分離政策として悪名高かった白豪主義政策についてオーストラリア政府は謝罪をしました。和解の前には謝罪がなければいけません。謝罪の前には事実の調査がなければいけません。事実を認めなければいけません。残念ながら日本にはまだ認めていない人たちがいます。そんな中でオーストラリア政府はようやく謝罪をした。

そうした取り組みは私なりにいえば社会が臨床されなければいけないという

ことです。個人が臨床されるだけでは半面でしかありません。だから私は社会臨床という言い方をしています。ですから、私は私の立場から動きの中で考えながら、できることをしようと思っているわけです。私は動きの中でできることをしようと考えた。そして、何よりも具体的な形を通じて加害の多層性、被害とのつながり、あるいは加害の中にある被害、そんなことを考えていきたいなという風に思いました。暴力は脱学習できるということが人間科学と平和学習を結び付ける、私なりのアプローチの仕方です。今日は皆さん、どうもありがとうございました。

---

中村正（立命館大学応用人間科学研究科教授 社会学）

暴力の臨床を行いながら研究をしている。贖罪と謝罪、修復と恢復、和解と責任等のための「社会臨床学」を構想している。